新　刊

□益村　聖：**原色九州の花・実図譜 I ～ IV**　B5. 各￥4,200 ＋税．海鳥社．I (2003):126 pp. ISBN: 4-87415-468-9, II (2005):126 pp. ISBN: 41-87415-535-9, III (2007):126 pp. ISBN: 978-4-87415-651-3, IV (2009):127 pp. ISBN: 978-4-87415-754-1.

一頁に一・二種類の着色画が，5cm のスケールバーを伴って描かれている . 着色は色鉛筆によるものだそうだ . 図は透明感があってアッサリした感じだが，葉脈の細部まで細かく表現されているばかりか，地下部も描かれているものが多い．花の拡大図は少なく，解剖図はない．

近頃はだれでも原色写真を編集できるようになったから，植物図鑑は作りやすくなったように思えるが，自筆の線画となると牧野富太郎は別格として，緒方氏，吉川氏，桑原氏，浅野氏，井波氏，長田氏，井上氏らの限られた主題による業績が知られている程度ではなかろうか . 植物画は隆盛だが，話題性のあるものや恰好よい対象に偏る . 写真の方が正確な記録だという人がいるが，あれは機械が記録するのであって，人の頭脳が記録するものではない．画家に依存した図は，いかに密接に連携しても，依頼者当人の意識とはズレがある．本シリーズのような，自筆の線画に着色した図で，地域に産するすべての顕花植物を記録しようという企画は，よほどの決意がなければ手を付ける者はいないだろう．この四冊で 756 種類が記録され，5 巻で完結の予定とのこと．

配列は材料入手の都合で分類順には並んでおらず，説明はごく簡単で，図鑑としての利用には不満をもらす向きもあるだろうが，とにかく予定通り完結させるのが先決だと思う．近頃は編集ソフトが発達しているから，すべての図を分類順に配列し直すことは，むつかしくはあるまい．それができてから，あらためて図鑑用の説明を考えたらよかろう．そのときのために必要なことは，図の元になった素材の標本データとその保存場所の表記である．それがあれば，植物名や図の表現に疑問が生じたりしたときに，素材に遡って訂正ができるし，後世の人が標本に則って図を補足したり，名前の再校訂を行ったりできる．各県で植物誌を刊行しているように，「地方」が植物図鑑を刊行して悪いわけはなく，それが北日本の植物をカバーしていなくても，文句をいわれる筋合いはない．

これだけの数の図を描くのだから，ほめてばかりいられないケースもある．IV 巻 15 頁のサツキ，マルバサツキは，花の姿勢が上下逆ではないかと思う . またマルバサツキにはガイドマークが描きおとされている．私は年度始めの授業でツツジの花を学生に持たせて「どっちを上にして咲いているか？」と質問することにしており（99 % の者はそんな観察点があることを知らない），花の形や姿勢と花粉媒介動物の関係の理解に使うので，ツイ気にしてしまうのだ．他のツツジ・シャクナゲ類の図は「正常な」姿勢に描かれている．

著者は数々の悲運を乗り越えて，この図鑑の刊行に賭けておられる．是非とも達成していただきたい．（金井弘夫）

□太田陽子，小池一之，鎮西清高，野上道男，町田　洋，松田時彦：**日本列島の地形学**　B5. 204 pp. 2010. ￥4,500 ＋税．東京大学出版会．ISBN: 978-413-062717-7 C3044.

フロラや植生が拠って立つ地形と，それがもたらす環境については，調査や観察の際一応の注意を払うし，地史や気候との関連で記述するのが常識となっているが，地形についての知識や理解は，少なくとも私の場合には，かなり怪しげなものである．本書は現在の日本列島の地形の出発点である新第三期に始まり，現在の地形に至る過程が，最新の観測・研究結果を動員して書かれているので，難しいけれど旧来の知識を刷新するのに有用である．とくに，デジタル化されたさまざまなデータを処理して得られたグラフや地図には，私たちの領域でも利用できそうなものが多い．たとえば「国土地理院 10m-DEM による富士・箱根火山群の地形図」を見ると，富士，箱根，愛鷹火山の形成時代の違いが一目でわかってしまう．「宗谷岬から種子島までの地形投影断面と気候植生帯」は，どこかで見たような気がするが，新しいデータから構成されたものである．

6 章より成り，1 変動帯日本列島の成り立ちと編年，2 変動帯を特色づける山地・平野・火山の形成史，3 第四紀における気候・海面変化に伴う地形変化，4 変化しつつある日本の地形，5 自然災害と地形の人工改変，6 未来の地形と地形学の未来，という構成である．とくに 1–2 日本列島の地形の概観，1–3 日本列島の気候とその変化は , 知識の整理に有用である．つまみ食いでもよいから , 目を通しておくことをお勧めする．（金井弘夫）